

ミニフォーラム

幸せの価値観とは？ ランドスケープは人を幸せにできるか？

企画責任者：新保奈穂美 筑波大学生命環境系 水内 佑輔 東京大学大学院農学生命科学研究科

1. 趣旨

戦後の成長社会と異なり、現在の成熟社会では幸せの価値観が多様化している。ひたすらに働けば地位を築ける、あるいは富を築けるという前提は崩れ、仕事第一という価値観はゆらいでいる。地位や富がなくともまずまずの暮らしを営むに十分なモノやサービスも充実している。こうしたなか、真に自分が望むものを選択し、選択しようとする風潮が高まっている。

ランドスケープに関わる研究者や実務者は、その評価・管理・創出に関わるなかで、多様化した幸せの価値観を捉えきれているであろうか。ランドスケープは人の営みと土地・自然との関係性の表象である。よりよい関係性を希求するには現在の多様化した幸せの価値観が踏まえらるべきである。

そこで本ミニフォーラムでは、ランドスケープに関わる研究者および実務者が、まずは自らの幸せの価値観に立ち返り、その幸せの価値観にランドスケープがどう関わっているかを議論することとした。当日は、様々な意見を収集することを意図し、話題提供と同時に並行で聴衆との意見交換を行うよう努めた。

2. 話題提供者の発表要旨

「ハビネス・ランドスケープ（野外レク・子育て・大学教員）」 武 正憲（筑波大学芸術系）

学生時代からカヌーが好きであり、カヌーを行う場について研究をしたいという思いが自然地全般の保全意識へと徐々に繋がっていった。それが卒業論文・修士論文のテーマ、野外レク専門学校におけるインストラクターの仕事、そして博士論文のテーマとして表れた。

大学の実習や調査における遠く離れた自然地での学生とのフィールド経験では、学生たちが携帯電話等を使用できない分、その場の人々と直接のコミュニケーションを楽しんでおり、日常に表れない幸せを見た。一方、子育てを中心とした私生活を通じて、大部分の人々は生活空間に近接した中にある自然を通じて幸せを享受していることを発見した。

「糸魚川市根知地区の農村景観と研究者の幸せ」 浜 泰一（東京大学空間情報科学研究センター）

時間を自由に調整し、生活に困らない程度のお金を確保しながら、新潟県糸魚川市で義父母の米作りを繁忙期に手伝っている。米作りには友人が来ることもあり、交流の種ともなっている。ただし米作りや山菜採りは現地の人にとっては遊びではなく必要な作業であり、これらの営みによって山と田を要素とした景観が形成されている。この景観の維持に関われるという点から、個人的には今の暮らしは幸せである。さらに R. Layard による幸せに関する Big Seven Factors（Ⅰ家族関係、Ⅱ経済的状況、Ⅲ雇用、Ⅳコミュニティと友人、Ⅴ健康、Ⅵ個人の自由、Ⅶ個人の価値観）に糸魚川に通う自身の生活を当てはめると、自分の現状は幸せであると言える。

「震災遺構に関するインタビュー調査とコンサルタントでの勤務経験から」 西坂 涼（千葉大学大学院園芸学研究科）

都市計画コンサルタントを経て、現在博士後期課程で東日本大震災の震災遺構の保存に向けた検討プロセスについて研究調査を行っている。震災で子どもを亡くした遺族でも必ずしも常に不幸せの境地にいと限らず、震災遺構への意見内容に関わらずやるべきことを見つけて動いている人は充実感を持っているように感じた。この充実感の先に幸せの可能性が感じられ、震災遺構と公園の一体的な整備など、幸せへの手がかりをつくるのがランドスケープに携わる者のライフワークにあたるのではと考えている。

一方で、現実にランドスケープをつくる仕事として建設業界に注目すると、若手の労働環境は過酷である。過剰労働やストレスに苛まれ、目標が見えなくなっている人が多い。ライフワークにたどり着く前にワークライフバランスを保つことが難しい。

「自身の原風景と公私における幸せについて」 堀野 哲（浜松市都市整備部公園課）

静岡に生まれ、祖父母が育てる茶畑で南アルプスの麓で茶摘みをしてきた。なかなか一杯にならない籠や、摘んだ後の茶畑の色が変わる様、大井川鐵道の SL の風景等の思い出がある。こうした環境で家族の庇護を享受して育ったことが自分の原点である。

以前仕事で取り組んでいた公園管理については、市民とのやり取りのなかで、エゴの衝突を実感する。ランドスケープは公的な空間であることがほとんどで、そこで個人的な幸せを実現させようとするのは難しい。例えば、子どもの遊び声と近隣住民の問題、観光客と地元住民、犬の散歩、グランドゴルフやボール遊び、それぞれの間にジレンマが生じている。考え方の違いを認め合うことが求められている。

私生活に関しては、昨年大学の同級生であり同じくランドスケープの仕事に携わる女性と結婚をした。約 5,000 人の職場のなかで造園技術職は 13 人であることが象徴するように、本分野は狭い業界であり、結束が大事である。そうした状況で同業者に祝っていただけて、幸せを感じた。

3. 聴衆の意見とまとめ

聴衆 18 名から頂戴した意見の一部を以下に挙げる。

- ・大自然より都市の中のちょっとした緑に興味があり、そこにどう幸せを絡められるのか、示唆を得ることができた。
- ・ハードなイメージが強い造園学会で、人の心に関わるのが題材として取り上げられたことが幸せである。
- ・造園業の実務に関わる中で、市民とのやり取りが悩みであったが、みんな苦労していることが分かって勉強になった。
- ・アメリカから移住し、様々な暮らし方があることは日々感じていた。家族がいるとランドスケープに求めるものが変わると知って、価値観のシフトが面白いと感じた。

本ミニフォーラムでは、話題提供とわずかな意見交換に留まった。今後も幸せとランドスケープの関わりについて調査・対話を行っていき、実務や研究、教育に反映できるような成果を生み出したいと考えている。（文責：新保奈穂美）